

News Letter

■2015年4月6日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は10件が採択されました。本号では、シリーズ第4回として、中島誠先生の「学習支援実践Ⅰ」におけるPBL教育の実践報告を掲載します。

2014年度開講 「PBL教育支援プログラム：振り返りの工夫」成果報告 (4)

「 学習支援実践Ⅰ 」

② 授業のねらいと概要

本授業は、受講生が、他者(主として同僚、後輩)の学びを支援するための態度やファシリテーション技術を身につけることを目的としている。

本年度は、3学部から計4名の学生が受講した。本授業で受講生は、週に2つの授業に参加する。1つ目はファシリテーションの理論を学び、受講生同士で実践について話し合う授業であり、受講生と授業担当教員、スチューデント・アシスタント(以下SAと省略)で構成される。2つ目は、ファシリテーション実践の場として、初年次学生向け授業4つのカスタートアップセミナー(以下4SUSと省略)である。4SUSは、職場においてチームで働く場面を想定し、学生同士がグループでプロジェクトに取り組む授業形態をとっている。ランダムに組まれた4人1組のグループで学生同士が協同作業を遂行するプロセスで、主体的学びへの転換やグループ内の対人関係に困難を感じる学生も少なくない。本授業の受講生は4SUS担当教員と協力しつつ、4SUS受講生である新入生の学習支援にあたる。

また、本授業の受講生は2つの課題解決を実施する。1つは受講生に対する直接的支援であり、担当の4SUSクラスを観察して学習支援に関する課題を発見し、そこに介入することである。2つ目は授業

構造に対する批判的検討であり、本授業の後半で、自らが考えた授業構造の解決案をプレゼンテーションする(表1)。これら課題は受講生自身が独自に設定するものであり、その意味で本授業は「問題自己設定型PBL」の形態をとる。

一連の活動を通じて、受講生は一方的に情報を伝える「教授」ではなく、学習者が自ら気付いて成長することを「支援」する技術を学ぶことになる。

② 本授業における振り返り

本授業において受講生は a) 支援の行動目標策定、b) 4SUSでの実践、c) 実践の振り返り、及び課題発見、d) 「学習支援実践」授業において他の受講生との支援方法の吟味、e) 新たな支援方針の策定、といった活動サイクルを繰り返す。授業後半では、個人単位で授業改善のためのプレゼンテーション及び質疑応答を行なう。さらに、授業の最終回において、自らの成長について振り返る(図1)。

本授業における振り返りの特徴を以下に示す。

・理論に基づく振り返り

振り返りの観点の一つとして、ファシリテーションや協同学習の理論との比較を意識づける。受講者自身の漠然とした振り返りや受講者同士が話し合っ

て得られた発見のみならず、支援に対する理論的裏付けに基づいた批判的思考による振り返りが可能となるよう配慮する。

表1 本年度の課題例

受講生への介入	授業構造への介入
<ul style="list-style-type: none"> ・私語や睡眠等の逸脱行動 ・役割分担や発言、グループへの貢献の偏り ・ファシリテーターとして関与する方法 ・「調べ学習」型プロジェクトから「提案」型プロジェクトへの移行 ・プロジェクト進行の遅れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のゲーム化(成長のフィードバック) ・授業間の連続性の強調 ・課題実施、確認のタイミング変更 ・「問い」を立てるトレーニングの導入 ・授業補助者の積極的登用

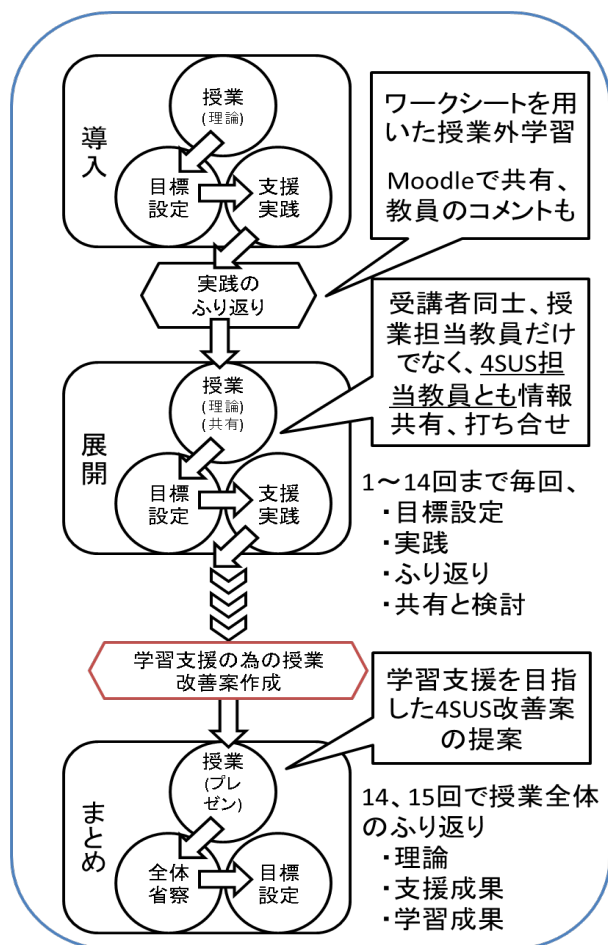


図1 「学習支援実践 I」の授業構造

・実践的ふり返し

受講者は、支援の実践結果について4SUS受講生の反応を踏まえてふり返しを行なう。成績評価とも関連するふり返し用ワークシートが用意され、毎回の授業で提出する。「行動目標」、「実践のふり返し」に加え、テキストを用いてファシリテーションの考え方を予習する「次回までの課題への回答」の3点について記入する。これにより、焦点を絞った活動実践とふり返りの実現を目指している。ワークシートは授業内での各受講生の活動報告と、受講生同士の議論にも用いられる。

また、授業後半では、毎回のワークシートに加え、4SUSの各グループごとの状態を観察し、記述するように求めている。それらについても本授業内で他の受講生に配布し共有される。具体的な状況把握と支援成果の記述から、受講者同士のふり返し、意見交換、次回目標設定をより有意義に行う。授業後にはMoodle上で相互に閲覧できるよう資料がアップロードされる。

・重層的ふり返し

本授業のふり返しは、受講生自身が行なうもの、受講生同士の議論によるもの、受講生と学習支援実践担当教員で議論されるもの、受講生と4SUS担当教員で議論されるものがあり、常に複数人による多面的視点が含まれている。

② 振り返りを中心とした授業の成果

本授業の最終回で、学生が述べたコメントを紹介する(表2)。授業におけるふり返しと関連すると思われる内容として特に「自己への気づき」と分類した発言で、自己の立場が明確化、相対化された様子が見て取れる。和栗(2010)は、ふり返りの深度を4段階で紹介しており、本授業の成果はその3段階目「多様な見方から俯瞰できており、分析的かつ統合的」な状態であると解釈できる。これは、最も深い段階の手前に位置するものであるが、学生から支援者へと立場を変え、その支援方法を他者と比較検討することで、受講生の支援に対する考え方が拡張されたと考えられる。

なお、ふり返し形態の異なる授業との比較や、具体的体験とふり返りの深化の関連などの検討は、まだ残されたままである。様々なレベルのふり返りが、ふり返しに効果を持つことには疑いはないが、学習に対して必要十分な意味のあるふり返しを実現する方法について、今後も検討を続ける必要があるだろう。

(中島 誠)

表2 受講生の最終のふり返し

<p><ファシリテーターの概念に関するもの></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターの概念が理解できた ・一歩先の問いかけをすぐに出せるようになった ・支援するグループと自分との間合いを学んだ <p><自己への気づき></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の対立から、自分と異なる視点に気付いた ・人の意見を聴くことの大切さに気付いた ・自分のやり方の軸を発見した ・自分のやり方が正しいという思考から、一つの方法にすぎないということを学んだ ・自分のやり方について考える機会、時間が増えた <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4つの力の内容をより理解した ・教員側の雰囲気を知ることができた
